

星野敏男 (明治大学)

Outdoor Education Environmental Education Adventure Education Humanizing Environmental Education

諸 言

アメリカにおいてOutdoor Education という言葉が教育界も含めて広く一般に使われるようになってきたのは、1950年代に入ってからである。これはそれまでのCamping Education, School Campingとよばれていたものが主に政策的な理由によりOutdoor Education とか Resident outdoor Education という呼び名に換えられていったことが大きなきっかけとなっている。当時Camping という言葉は、サマーケーションの中で行われるレクリエーション的活動として受け入れられており、教育とは何ら関係を持っていないものと考えられていたからである。本研究は、このようにさまざまな変遷を経ながら現在に至っているアメリカの野外教育の歴史を探ることにより、それがいつ、どのように発生し発展してきたのか、また、指導者や時代の流れの中でどのように変化してきたのか、将来の展望をも含めて明らかにしていこうとするものである。

野外教育とは何か、という用語そのものの概念規定については実に多くの定義がなされており、学術誌などの専門書に定義された主なものだけでも17の異なった見解が発表されている。本研究では、これら多くの定義を包含したものとして今でも広く用いられている、“Outdoor Education is education in, about, and for the outdoors.”という定義を用いるものとする。

また、本論で扱う野外教育の歴史とは、アメリカの学校教育の中で行われてきた、主に宿泊を伴うような野外教育の歴史であり、いわゆる組織キャンプや野外活動そのものの歴史とは異なる。

野外教育の歴史

ここでは野外教育の歴史を1930年以前と以後の二つに大きく分け、さらに1930年以降については、ほぼ10年毎にその年代の特徴を述べる。また、現在の野外教育の思想的・哲学的バックボーンともなっている初期の指導者達の考え方についてもふれる。

1930年が野外教育の歴史の中でひとつの大きな区切りとされるのは、次のような理由からである。

1. L. B. Sharp のドクター論文、“Education and the Summer Camp—An Experiment—”が刊行されたのが1930年で以後の野外教育界に多大な影響を及ぼしたこと、

2. Dimock & Hendly がその著書 *Camping and Character* でキャンプの教育的効果を述べるとともに、今後学校当局はますますキャンプを含んだ教育プログラムを進展さ

せていこうと表明したのが1929年であったこと、

3. 1800年代から1930年までは、それまでのいわゆる組織キャンプから学校キャンプへのゆったりとした流れの中での移行期としてとらえることが可能であること、

4. Donald R. Hammerman が彼の論文 “An Historical Analysis of the Sociocultural Factors that Influenced the Development of Camping Education” の中で1930年代を Period of Inception としてそれ以前の時代と明確に区別したこと、また、この区別を多くの研究者が支持していること、など、以上のような理由があげられる。

1930年以前 —最初の学校キャンプ—

現在アメリカの教育界で広く行われている宿泊を伴った野外教育 (Resident Outdoor Education) や、さまざまな機関で実施されている組織キャンプ (Organized Camping) と呼ばれているものの始まりは、一般には1861年に Frederick William Gunn によって始められた School Camping が最初のものであろうと言われてきた。

しかし、最近の研究では1823年から34年にかけてマサチューセッツの Round Hill School において実施された School Camping が野外教育のはじまりではないだろうとも言われている。

この二つの学校で行われたキャンプのうちどちらを野外教育のはじまりとするのかという点に関しては今もって見解が分かれている。ここでは、この二つのキャンプに関して、その特徴的な面だけを抜き出しておく。

Round Hill School

創始者の一人 J. Cogswell は熱心な徒歩旅行者で、数年間ヨーロッパを旅行した後、その自然の美しさやハイキングを通して得られる心と身体の健康を多くの若者にも分かち与えようと考え、1823年学校を創設する。彼の学校では毎週土曜日の午後は12~16マイル (約20~25 km) 歩き、秋の感謝祭の週末には乗馬と徒歩を組み合わせた約160 Km 歩いたという。彼はまた、植物学や鉱物学に造詣が深く、ハイキングの途中でその指導を行ったとある。また、この学校はカリキュラムの一部として体育を取り入れ、体操の教師を雇ったアメリカで最初の学校であるとも言われている。

The Gunnery Camp

このキャンプは既によく知られているように1961年、

Frederick W. Gunn によってはじめられたものであり、今でも最初のOrganized Camping と言われているものである当時多くの子供達は兵士になることを望み、特に兵士のようにテントの中で寝ることに強いあこがれを持っていた。Gunn夫妻は1861年60人の生徒全員を2週間のキャンプに連れだした。幌馬車に荷物を積み、2日間の行程でキャンプ地についた彼らは、そこでボートセーリング、フィッシング、徒歩旅行などをして過ごした。このキャンプは1861年から79年まで合計15回実施された。

この二つの学校で行われたプログラムは、いずれも、運動、健康、自然観察、娯楽、といったものの目的のために作りあげられたプログラムであり、それらが、はたして野外教育と呼べるものであったのか、あるいは、いわゆる娯楽としてのレクリエーションであったのかという点に関しては今もって論議が繰り返されている。どちらのプログラムにもそれぞれ、体育学、博物学、あるいは今日言われているレクリエーションやレジャーといったものの要素がふくまれており、一概に決めつけることは困難である。

ただひとつ言えることは、この二つの学校で行われたプログラムでは、現在アメリカの野外教育界でさかんに用いられ、教えられているような環境に対するステewardシップ (Stewardship of the Environment) や自然そのものに関する教育等は全く重要視されていなかったということである。

この二つの学校によって始められたキャンプを見てわかるように、初期の野外教育とは、いわゆる野外活動であったり、あるいはまた時期も夏期休暇中に行われたキャンプの中だけに限られているだけであった。つまり、当時はまだ普通のクラスルームの中に野外教育が取り入れられていたわけではなかった。また、教員にしても、野外での指導に長けている者、よく訓練されている者は当時まだ少なかった。

1930年以前に学校の教科の中に野外教育プログラムを取り入れた学校は殆どなかったが、この間、学校とは別に、1861年の Gunnery Camp をきっかけに全米のあちこちでいわゆる組織キャンプが活発に行われるようになってきたYMCA、YWCA、ボーイスカウト、ガールスカウト等がキャンプをはじめたのもすべて1890年から1912年のあいだのことである。同時にプライベートキャンプやチャーチキャンプ(教会キャンプ)もともに大きく広まっていった。また、1910年までには、それまでバラバラだったキャンプディレクター協会がひとつにまとまり、現在のアメリカキャンプ協会(ACA)の前身である Camp Directors Association となって設立された。

野外教育発生の思想的背景について

主にレクリエーションな活動を目的としておこなわれた初期の野外教育であったが、それらが1930年以降になって Camping Education School Camping そして

Outdoor Education へと発展していった背景には多くの指導者の指導的基盤となった教育哲学や思想が深くかかわりあっていることは論を待たない。

既に古くから、ルソー、ペスタロッチ、スペンサーといった教育学者、哲学者が教育界に大きな影響を与えてきたのは周知のことである。19世紀の後半から20世紀の前半にかけても特にその時代の野外教育の発展に影響を与えた教育者は多数いた。その中でも特に、John dewey、William H. Kilpatrick、L. B. Sharp、L. H. Bailey、Louis Agassiz、William Gould Vainal、といった教育者達を大きな存在としてクローズアップすることが可能であろう。

そして、これらの教育者達はその後の野外教育への影響を考えた場合、大きな二つのグループに分けることができる。すなわち、デューイ、キルパトリック、シャープというプラグマティズムの思想に強く影響を受けたプラグマチストグループ(体験学習グループ)、とアガシス、ベイリイ、ヴァイナルへと続く Nature Study グループ、すなわち自然学習グループである。後に野外教育の発展に大きな影響をあたえたスミス、ドナルドソン、ハンマーマンなどもこの二つのグループから大きな影響を受けたことはいうまでもない。このふたつのグループの教育思想の流れは今でもアメリカばかりか日本においても強く流れているのを感じとることができる。日本では体験学習としての野外活動や野外教育が、アメリカからキャンプが伝わってきた当時そのままに近い状態で定着していったのに対し、アメリカではこの自然学習グループの教育思想を背景とした野外教育が特に1960年以降急速に発展、拡大し、さまざまな様相を呈していくようになるのである。

スクールキャンプがオーガナイズドキャンプ・ムーブメントの中から発展してきたものであることは論を待たないこの時期、すなわち、キャンプがいわゆる教育を目的に組織されはじめた1800年代から1930年までの時期は、さまざまな組織キャンプにおけるプログラムを教育者達がスクールキャンプ・プログラムとして受け入れはじめた時期であり、この意味においては、時代的にこの時期を移行期としてとらえることができよう。

この時期、野外教育はキャンプの中で徐々にその形を整えていきつつあった。ただひとつこの段階で足らなかったものは、このようにさかに行われるようになってきたキャンプが、教育の目的とどのようなかかわりあいを持っているのかという、教育的なうらづけであった。つまり、キャンプの効果を学校教育の目的とのかかわりあいから実証し、再確認していく場や、そのための指導者といった条件が整っていなかったのである。この条件をやがて満たしてくれたのが Dimock & Hendly の *Camping and Character* や Bernard S. Mason の研究論文であり、さらにまた指導者としてもその思想とともに後の野外教育に最も大きな影響をあたえた L. B. Sharp のドクター論文 *Education and the Summer Camp* であった。こうして時代は1930年代へと大きな変化を遂げながら進んでいった。

1930年以降の野外教育

1930年以降の野外教育の発展を歴史的にみた場合、その発展過程をいくつかの時代区分に分けて考えることが可能である。区分のしかたは、研究者やその観点によりさまざまである。代表的な例としては、ディモック、ハンマーマン、カークの区分、フィリスの指導者による区分、また、スミッセンによる研究の変遷から見た区分などがあげられる。ここでは、これらの先行研究をふまえた上で、野外教育を教育界における新しいムーブメントそのものとしてとらえ、それが成長・発展・変化していく過程を特徴的ないくつかの時代に区分し検討していくこととする。時代の区分と命名は以下の通りとした。

1. 発生期 (1930~39)
2. 啓蒙期 (1940~49)
3. 定着期 (1950~59)
4. 転換期 (1960~69)
5. 多様化の時代 (1970~79)
6. 人間化の時代 (1980~)

1. 発生期 (1930~39)

この時期は野外教育としてのスクールキャンプが実際に実施されるよりもむしろ議論された時代である。もちろんいくつかの進歩的な学校ではキャンプ・プログラムを学校教育の中に取り入れるところもあったが、全体としてみると学校教育のなかでキャンプを実施しているところは少なかった。しかし、先に述べたように、キャンプの教育的効果に関する論文や著述などを通して、教育者達のあいだではキャンプの教育的効果が徐々にではあるが認められていきつつあった。特にL. B. シャープの論文は関係者のあいだで大きな反響をよんだ。彼の論文はデューイやキルパトリックによって形づくられた教育の目標とキャンプとの関係について分析を試みたものであった。当時の彼の考え方の中では、学校教育としてのキャンプを意識したものではなかったが、彼はこの論文を通してキャンプがきわめて教育的な要素を持っているものであるとの確証をもった。

とは言え、この時期に行われたスクールキャンプは、これまでYMCAやボーイスカウトなどによって実施されてきた伝統的なサマーキャンプに近いものであった。キャンプ・プログラムとしては、自然観察、キャンプクラフト、水辺活動、ハイキング、乗馬等であった。この頃のスクールキャンプの目標は、主に共同生活や労働体験などに中心がおかれていた。これは、生活教育という、当時教育界で流行していた教育哲学に大きく影響をうけてのものであった。

一方、当時行われていたオーガナイズドキャンプ、いわゆる組織キャンプとは青少年の健全な育成を目標にボーイスカウトやYMCA、教会などの機関が中心となって行われていたもので、集団生活や規律の重視とともにレクリエーションとしての野外活動が中心的プログラムであった。

ただし、これらの各種機関が主催したサマーキャンプに参加できたのは当時の中産階級以上の子弟に限られていた。つまり、当時のいわゆるオーガナイズドキャンプを経験できたのは、ごく限られた子供たちだけであった。これに対し、スクールキャンプの場合は、貧しい家庭の子供たちや黒人の子供たちなど誰でも参加できるという点に特色があった。スクールキャンプが普及していくということは、とりもなおさず一般の多くの子供たちにキャンプへの参加の機会が与えられていくということでもあった。当時は同じような内容を持ったキャンプであったが、組織キャンプとスクールキャンプの違いはこの点にもあった。以後、組織キャンプとスクールキャンプはそれぞれ違った道を歩みはじめ、お互いに影響しあいつつもそれぞれ独自の変化、発展を遂げていくこととなる。

本論は、以後、現在アメリカの学校教育の中で用いられている野外教育の原点となった School Camping や Camping Education の発展、変化を歴史的にとらえていくとするものであり、いわゆるキャンプそのものの歴史を論じているのではないことを改めて断っておく。また、YMCA など各種の機関が主催したキャンプをここでは便宜上組織キャンプ、あるいはオーガナイズドキャンプと呼んだ。

2. 啓蒙期 (1940~49)

この時期は現在の野外教育の前身である Camping Education や School Camping がさまざまな研修会、会議等を通じてアメリカ東部を中心に各地へと広まっていった段階としてとらえることができる。そしてこの時期、野外教育の必要性を説き、その啓蒙に大きく貢献したのが、L. B. Sharp と Julian Sumith の二人であった。ここでは全く別々にはあったが、同じ時期に活躍した二人の活動を中心に述べる。

L. B. Sharp と Life National Camp

既に述べたように、1930年代の後半までには、キャンプを学校教育の中に取り入れることは、きわめて効果的、かつ価値あることであるという認識が徐々に学校教育関係者の中に広まりつつあった。また、シャープが中心になって実施していたライフキャンプには多くの教育関係者が見学にくるようになっていった。

かねてからキャンプの分野における本格的な指導者の養成やトレーニングの必要性を感じていたシャープは、1940年、キャンプリーダー養成のための第一回ナショナルキャンプを開催することとなった。このナショナルキャンプはきわめて有能なスタッフで構成されており、彼らはこのキャンプの内容を実にしっかりとしたものにすると同時に、スタッフの多くはその後長年にわたって野外教育の発展にきわめて重要な役割をになうようになっていった。自然学習で著名な W. G. Vinal などこのスタッフの一員として活躍した人物であった。

1940年代を通じてこの6週間のサマーセッションは継続され、アメリカ、カナダのさまざまな地域から教育関係、教会関係、そして、Youth 関係の指導者が参加した。参加者は皆シャープの指導のもとにその理論と実践の両方を学びとっていったのである。1942年にはニュージャージー州の要請により、シャープのもと、六つの州立カレッジにおいて、最初の教員養成コースのための野外教育集中授業が開講されるまでに至った。また、1946年には教育局長や教員養成系の大学の教授、校長らを招き3日間の会議を開くなど、ナショナルキャンプを積極的に国内に広めていったこれらの活動を通して、シャープはこの時期の野外教育における第一人者として万人に認められるところとなった。

また彼は、ナショナルキャンプのリーダーとしての役割を長年務めると同時に数多くの論文や記事をさまざまな機関を通じて発表し、キャンプ教育を学校教育の中に取り入れていくことを強く主張していったのである。

今でもよく引用される彼の主張に次のようなものがある一室内（クラスルーム）において最も有効に教えることのできるものは室内で教えらるべきであり、反対に、自然の物や自然の環境を直接体験することによってより有効に学ぶことができると考えられるものは、そこ（Outside the School）で教えらるべきである。—というものである。これは、当初から彼が一貫して主張してきた学校教育の中でのキャンプ教育のすすめである。しかし、ナショナルキャンプを続けていくうちに彼の主張にもその内容にすこしずつ変化があらわれてくる。1947年に発表した記事の中では、それまでどちらかというとキャンプのための教育というような意味で用いていた Camping Education を教育のためのキャンプ環境の利用、すなわち、キャンプ場面を用いた教育としてとらえるようになっていったことが伺われる。また彼は、この頃から Camping Education という用語とともに Outdoor Education という用語を多く用いるようになっていった。

Camping Education や Outdoor Education という言葉そのものを最初に使いはじめたのは誰なのか明らかではない。しかし、少なくとも、Camping Education という言葉を定着させたのはシャープであり、さらにこの言葉を Outdoor Education へと変えていったのも彼である。彼は野外教育を、ひとつの教科に限らず、もっと大きな学際的なもの、あるいはまた、学習のための方法や条件、環境としてとらえ、その適用の場をキャンプ場面ばかりでなく、学校の校庭など身近な場所から広い自然界までに広めていった。すなわち、学習のためのすべての環境の利用といったような大きな概念として野外教育というものをとらえるようになっていった。

Julian W. Smith と Clear Lake Camp

野外教育の必要性を説き、その基盤を築きあげてきたのはL.B. シャープであるが、この野外教育が現在広くアメリカでおこなわれているような野外教育として定着していくにはミシガン州におけるスクールキャンプ運動、野外教育

運動によるところが多い。というのも、ミシガン州では全米に先駆けて州の教育法のもとで、学校が通常の授業の一部としてキャンプ場を持ちそれを運営しても良いということが法的に認められたからであった。1945年第二次世界大戦直後のことである。そしてこの教育法制定に至るプロジェクトのディレクターとして大いに活躍したのが Julian W. Smith であった。

彼はシャープがナショナルキャンプを実施した同年（1940年）に、Clear Lake Camp において、初めての年間を通じてのスクールキャンプ・プログラムを開発していった。彼が開発していったコミュニティスクールキャンプや彼が中心となって主催したナショナルワークショップは、シャープのナショナルキャンプと並び、この時代における野外教育の先駆けをなすものであった。彼の唱えた野外教育については、既に我が国でも知られているが、この時期スミスが開発したコミュニティスクールキャンプは、主に四つの大きな目標から構成されていた。労働体験、健康生活、社会（共同）生活、レジャー活動であった。とはいえ多くの場合は、野外生活技術やアーチェリー、フィッシング、ハンティングなど、いわゆるレジャー、レクリエーション的活動がそのプログラムの主流を占めていた。シャープのナショナルキャンプと同じく、このクリアレイクキャンプには多くの教育関係者が集まり、スミスの唱えるコミュニティスクールキャンプは一気にミシガン州全体へと広がってゆき、州の教育法制定のための大きな原動力となっていた。

スクールキャンプや野外教育の分野において、シャープがリーダーとして既に高い名声を得ていた1940年代、スミスはその教育活動をミシガン州のレベルまで押し上げていき、野外教育のさらなる発展のための土台づくりをしていた。スミスの野外教育への貢献は1950年代に入り、さらに一層巨大なものとなっていく。シャープに代わるニューリーダーの出現でもあった。シャープのその独特のリーダーシップ性が初期の東部アメリカにおけるキャンプ運動の中で傑出した個人的な影響力として認められているのに対し、ミシガン州が急速にアメリカ全土に対してその指導的立場を築きあげていったのは、スミスのほかに George Donaldson や Hugh Masters というきわめてすぐれた野外教育信奉者が一丸となって野外教育を押しすすめていったところが大きな要因であろう。

もちろん、場所が離れているとは言え、同じ時期に行われたこの二つのキャンプは、お互いに影響しあっていたのは事実である。ミシガン州の指導者たちはナショナルキャンプの6週間のサマーセッションに参加しているし、またシャープもクリアレイクキャンプにそのスタッフを連れて参加しているからである。1940年代から50年代にかけて、シャープとスミスはそれぞれに並行して野外教育の発展に貢献していくこととなる。

3. 定着期 (1950~59)

この時期の大きな特徴としては、それまでのレクリエーション的なプログラムから、より学校カリキュラムに関連を持ったプログラム (Curriculum Oriented Program) への移行期としてとらえることができる。さらにこのような動きにもとない、それまでさかんに使われてきた School Camping という言葉も徐々に影をひそめ、代わりに、Outdoor School, Outdoor Laboratory, School-in-the-Wood, など、新しい用語も続々と登場してきた。もちろん、Outdoor Education という用語がその主流を占めていたことは言うまでもない。また、さまざまな野外教育関係の組織が発足したり、学校キャンプ関係の規程が制定されるなど、この時期はムーブメントとしての野外教育がアメリカの教育界にほぼ定着していった時期としてとらえることが可能である。

1950年代に入り、スミスは野外教育界のニューリーダーとしてますますその頭角をあらわしてきた。この時期さかんに設立されていった野外教育関係の組織のうち、特に銘記しておかなければならないものにスミスが中心となって1955年に発足した Outdoor Education Project をあげることができる。これは AAHPER (American Alliance for Health Physical Education and Recreation) のもとに設立されたものであり、スミスはこのプロジェクトのディレクターであった。このプロジェクトは AAHPER の後援という当初の性格からして、アウトドアのレクリエーション活動を推進するためのものであったが、多くの野外教育関係の権し、ワークショップ、企画に対し、積極的に応援し、次第に野外教育運動推進の中心的存在ともなっていた。1950年代のアメリカ野外教育は、スミスとこの O・E・P を中心に動いていったと言っても過言ではない。

現在、日本の各地で実施されている学校キャンプあるいは林間学校などはヨーロッパなどからの影響も考えられるが、1940年代後半から1950年代にかけて、すなわち、戦後すぐにかけてのアメリカのこの時期の影響を強く受けたことも事実であろう。日本において、学校キャンプがその後アメリカのように野外教育として大きく発展・変化していかず、ある一定の形を保ったまま定着していった背景にはさまざまな要因が考えられる。勿論、当時日本のキャンプに影響を及ぼしたものが、YMCA やボーイスカウトなどで行われていた、いわゆる組織キャンプからのものであったことにもよるが、それとは別に、当時アメリカにおいて野外教育運動推進の中心人物であったスミスの考え方、あるいはまた、それを受け入れる日本の側にも、その後の日本の野外教育、特に、キャンプを決定づけていくような何らかの要因があったのではないかとおもわれる。以下この点についてすこし触れてみたい。

スミスの考えた野外教育は基本的に Education in the Outdoors と Education for the Outdoors に分けて考

えることができる。Outdoor Education という用語がシャープによって定着させられてきたことは既に述べたが、この Outdoor Education をより広範囲な意味を持ったものとして解釈していったのは、スミスが最初であったろうと思われる。

しかしながら、彼の発表した記事や著作などを見ると、広い意味で解釈されていた野外教育の中でも彼が最も強調していたものが、Outdoor Skill の発達やレジャー教育の必要性を説くことであったことがわかる。もちろん、彼がディレクターであった O・E・P (Outdoor Education Project) が AAHPER に属していたこと、また、このプロジェクトのスポンサーがいくつかのスポーツ用品メーカーであったことなどもこの O・E・P の持っていた性格的な背景として考慮に入れておかなばならないであろう。

さらにまた、組織キャンプや学校キャンプがアメリカから伝わってきた当時の日本では、キャンプはどちらかというところと体育の分野の中ですめられており、スミスの考える Outdoor Skill の考え方はさらに日本流に解釈されていったと見ることができるのではないだろうか。スミスの考えるカリキュラムとの関連の中でのスクールキャンピングのうち、日本では、それまでの歴史的背景や文化的背景、あるいは、後のスポーツ振興法の影響などにより、キャンプの中でも特に野外生活の体験や野外生活技術の修得、あるいは、体育的活動といったものに重きが置かれたキャンプが広まっていったものと思われる。

アメリカでは、このあと60年代に入り、スクールキャンピングが野外教育として、カリキュラムとの関連の中で大きな変化をとげていくのに対し、日本では、飯ごうすいさん、登山、ハイキング、オリエンテーリング、キャンプファイアーといった、ある一定の形を持ったキャンプや林間学校といったものが、カリキュラムとはかなりの距離をおいたところで定着していくこととなる。

この時期、すなわち1950年代は、アメリカにおいて野外教育が定着した時代であったが、反面、野外教育の出発点となった組織キャンプとそこから派生してきたスクールキャンピングとの間に最も大きな隔たりができた時代でもあった。この頃までには、スクールキャンピングは既に組織キャンプから独立し、独自の道を歩み始めていた。スクールキャンピングが、レクリエーション的なプログラムを少なくし、カリキュラムに関連したプログラムを開発していったのに対し、いわゆる組織キャンプは依然として共同生活を基本とした野外生活や、レクリエーション活動、すなわち、アーチェリー、フィッシング、ハンティングに重きを置き、学校カリキュラムに関連したプログラムは殆ど織り込んでいかなかった。この50年代は野外教育が定着していった時代であったが、それでもなお、カリキュラム中心の野外教育をしていくのか、キャンプ中心の野外教育をしていくのかということが指導者のあいだで大きな問題として論じられていたことが Robert Brimm (1959) の論文などからも充分伺うことができる。

これまでの時代に較べると、この60年代から70年代初頭にかけての野外教育の動きをひとつの言葉でくくるのは多少困難である。強いて言えば、自然資源や自然環境に対する人間の責任性が問われた時代、あるいは、野外教育から環境教育への転換期としてとらえることが可能であろう。これらを考慮しここでは転換期としてこの時代を扱うことにした。

Ecology (生態学) や Conservation (自然保護) という言葉が野外教育分野に限らずさまざまな人々によってもてはやされたのもこの時代である。また、野外教育よりもさらに大きな概念として Environmental Education (環境教育) という用語があらわれたのもこの時代であった。Environment とは、森とか湖、海といったある特定の自然つまり、Nature とか Outdoors だけを指すのではなく、それらをも含めて、都会、郊外、太陽、エネルギー、そして人類まで、我々をとりまくありとあらゆるものを指す言葉として使われている。とにかく、この60年代から70年代にかけては我々をとりまくあらゆる環境 (Environment) が国家的規模で取りざたされた時代であった。

野外教育のための各種の施設が各地に爆発的に増えたのもこの時代である。時の大統領 John F. Kennedy の声明 (1963) もさることながら、最も、強くこの傾向に拍車をかけたのは、1965年、教育委員会によって制定された、E S E A Title III (Elementary and Secondary Education Act) と呼ばれる野外教育やキャンプ教育に対する特別基金の制度であった。1966年から67年の2年間のあいだに、野外教育を含む89のプロジェクトに対して500万ドル (当時の日本円にして約18億円) が援助されたという。さらに1969年、月面からの地球の姿がテレビ画面を通じて国民の前に放送されるに及び、一惑星としての地球を見直そうとする気運や、地球の自然に対するスチュワードシップ (Stewardship) といった意識が高まり、それにつれて、野外教育も実にさまざまな方向へと枝分かれしつつ、その内容・プログラムにも大きな変化が生じていった。

また、多種多様なプログラムの発展と、それにとまなう用語やマニュアルの出現は、この時期を象徴する現象である。特にパッケージ・プログラム (Packaged Programs) とよばれる指導者のための野外教育マニュアルや指導ハンドブックは、この時期急速にアメリカ全土に広まっていった。Investigating Your Environment Series や Outdoor Biology Instructional Strategies (O B I S)、また、Project Learning Tree (P L T) などはこの代表的なものである。このような現象は、さらにその傾向を深め、次の時代へと受け継がれ、それぞれがお互いに影響しあいながらあるものはひとつのものに集約され、またあるものはさらに新しい方向へと発展、変化していった。この60年代は野外教育がその歴史のなかで最も大きな変化を見せた時期であった。

60年代の大きな転換期をむかえたあと、さまざまな方向に発展していった野外教育は、70年代に入りますますその傾向を強めていった。野外教育という概念に対する新しい考え方や、教育の場として自然を利用する場合の新しい利用の仕方の出現など、もはやひとつのラベルでその傾向を言い表すことは不可能に近い状態となっていた。多様化の時代と言うよりも、むしろ乱立の時代とでも言ったほうが良い程、野外教育の扱う対象はあらゆる分野へと広まっていった。

しかしながら、このような多様化の中にあっても、なおこの70年代の野外教育の傾向を二つの特徴的な流れの中でとらえることは可能である。Environmental Education と Adventure Education の二つである。

① Environmental Education

60年代から急速に広まっていった環境教育の動きは、70年代に入っても依然として野外教育の主流を占めるものであった。しかもこの扱う対象は、かつての40年代、50年代の頃とは較べものにならない程多くものを扱うようになった。伝統的な自然観察に類したものから、生態学、自然保護はもちろんのこと、エネルギー問題、都市問題、さらには人種問題など、我々をとりまくあらゆるものを対象とするようになっていった。小学校における3泊4日から一週間程度の宿泊野外教育 (Resident Outdoor Education) は、既にこの時期までには、ほとんど常識と言っていいほど学校教育の中に織りこまれていった。このような学校行事は依然として野外教育という言葉で言い表されていたがその扱う対象は、いわゆる自然環境から、人口問題、公害、交通問題など、トータルとしての環境問題を扱っており、内容的には、すでに Environmental Education (環境教育) と呼んだほうがふさわしい内容となっていた。

Steve Van Matre の唱えた Acclimatization や Acclimatizing、さらには Sunship Earth が野外教育の新しい試み、アプローチとして新風をまき込んだのもこの時期である。これは、個人と自然との関係を人間の五感をフルに活用して、より直接的に肌で感じとっていかうとするプログラムであり、野外教育の指導原理ともいべき直接体験を改めてみなおそうとするものであった。このプログラムは現在もおおく応用されており、さらに発展していく勢いをみせている。

② Adventure Education

アドベンチャー教育は、1962年アメリカに O B S (Outward Bound School) が紹介された結果として引き起こされたものであり、当初は Secondary School Level (中高校生) に適用されはじめた。1970年代に入り、多くの野外教育関係のセンター、施設、学校が、この O B S の哲学をさまざまな方法やプログラムを用いて彼らの指導の中に生かしていった。O B S の主張する基本的哲学とは、「大自然の中で自己発見をした者はそのまま自己の認識から他人

への思いやり、あるいは、学校、家庭、社会といった、生活をとりまくすべての環境にたいする関心へと移行させることができる。」というものである。

○BSのアメリカへの上陸を契機として、野外教育場面ではもちろんのこと、一般のキャンピングスクールなどでも、バックパッキング、ロッククライミング、登山など、克服型のプログラムが提供されるようになってきた。また野外教育関係の施設などでも新しく、チャレンジコースやロープコース、イニシアティブコースなど、アドベンチャー的な要素を備えたコースや、仲間の協力を要求されるようなコースを、その施設の中に保有するところが多くなっていった。

このような、アドベンチャープログラムや、Acclimatizationプログラムがこの時期急速に広まっていったのは、先の60年代の転換期からこの70年代の多様化の中で、それまでの野外教育が、あまりにも理科教育化しすぎていったための反動とも受け取ることができよう。アドベンチャープログラムにせよアクリマティゼーションプログラムにせよ、これらはいずれも直接体験を重んじたものであり、かつてL.B. シャープが唱えた Learning Processes や Learning by Doing といった野外教育の原点に今一度立ち戻ろうとしているかのようにおもわれる。これら、直接体験を重んじた野外教育プログラムはその後70年代後半から80年代にかけて Experiential Education として、Environmental Education とはまた別な形として、新しい方向に発展していった。

6. 人間化の時代 (1980～)

レクリエーションな活動としてのキャンプが、教育の対象として考えられるようになってから既に百年以上が経った。この間、Camping Education, School Camping, Outdoor Education, Environmental Education, Experiential Education など、さまざまな用語の出現とともに野外教育の方法やその内容も大きな変化を遂げてきた。

1980年代、すなわち、現代の野外教育を論ずるには、まだまだ時を待たなければならない。しかしながら1990年代あるいは21世紀へと時代が移っていった時、将来の野外教育者達はこの80年代にどのようなラベルを貼るであろうか

70年代の多様化の傾向を受け継ぎつつ、80年代に入り、ある程度安定してきたかに見えたアメリカの野外教育であったが、ここ数年、また新しいうねりが、押し寄せて来つつあるように思われる。Humanizing Environmental Education と言われているものがそれである。日本的に意識するなら、人間化の野外教育とでも言えようか。これは、今までの野外教育プログラムのなかに、さらに人間関係や社会性を発達させるようなプログラムをより強く織り込んだものである。その意味においても、野外教育プログラムの人間化ということができよう。特に、個人主義の発達したアメリカにおいては、今、グループでの問題解決能力や、

意思決定能力を向上させるような野外教育プログラムに対しても強い関心が持たれはじめている。70年代からさかんに用いられるようになってきたイニシアティブプログラムニューゲーム、アドベンチャープログラムなども言い換えれば、人間教育のためのプログラムであり、その意味においては、このようなプログラムの出現は現在の傾向の先駆けをなすものであったと行うことができよう。このような傾向はいずれもあまりにも多様化しすぎた野外教育への反省とも受け取ることができ、一言でいうならば、アメリカの野外教育が今再び自然の中での直接体験とそれに伴う“Learning Processes”という原点に立ち戻ろうとしている、と行うことができるのではないだろうか。

日本では、今もって、「野外教育すなわち野外活動であり、ある特定の野外活動プログラム、例えば、ハイキング歌、ゲーム、キャンプ・ファイアー等、ある一定のプログラムを消化しさえすれば結果的に野外教育になる。」といった考え方が根強く残っている。このような旧態依然とした考え方や実施方法を変えない限り、日本の野外教育に今最も欠けている環境教育の要素を加えることはもちろんのこと、レクリエーションな行事としての性格から日本の野外教育が脱皮することは困難であろう。

野外教育とは、本来、自然の持つ教育的価値を自覚した教育の一方法であり、当然、野外活動はその教育目的に応じたプログラムの一つとなるべきものである。野外教育には、さまざまな教育目標があげられているが、これら一つ一つの目標や目的を充分吟味した上で野外教育のためのプログラム理念を確立していくことが我が国の野外教育に課せられた急務ではなからうか。

日本でも近年、アドベンチャープログラムやイニシアティブプログラム、さらには、アクリマティゼーションプログラムなど、アメリカの新しいプログラムをどんどん吸収し、新しいキャンプや野外教育を展開していこうとしているところが増えてきた。このような傾向に加えてさらに環境教育的要素やプログラム理念の確立がすすめられていくなれば、近い将来、一見、まわり道してきたとも思えるほど、ありとあらゆるものを吸収し、取捨し、そして再び原点に戻ろうとしているアメリカの野外教育と、原点そのままとも言えるような古い型の中で、悪いものを捨て、良いものを伸ばそうとしてきた日本のキャンプを中心とした野外教育とが、再び、融合する時がやって来るかも知れない。

ま と め

本論は、アメリカにおける野外教育の歴史的変遷を、主に時代区分の中でとらえ、その時代の特徴的なことがらやその考え方の変化について論じたものである。したがっていわゆる組織キャンプや野外活動そのものの歴史を論じたものではない。また、本論では、野外教育に関する研究の歴史や初期の指導者たちの哲学にまで充分な考察を加えることはできなかった。これらはいずれも今後の課題としたい。

引用・参考文献

- 1) American Camping Association, Eleanor Eells' History of Organized Camping—The First 100 Years — American Camping Association Martinsville, Indiana 1986.
- 2) Bennet, Bruce L., "Camping and Outdoor Education Began at Round Hill School," *Journal of Outdoor Education* 3:14-17, Fall, 1968.
- 3) Brimm, Robert P., "What are the Issues in Camping and Outdoor Education? Camp-Centered? School-Centered?" *Camping Magazine*, 14-15, January 1959.
- 4) Dimock, Hedley S., and Charles E. Hendry., *Camping and Character*, New York : Association Press, 1929
- 5) 江橋慎四郎「野外教育」体育の科学社 1969.
- 6) 江橋慎四郎・今井鎮雄(編)「キャンプの基礎」日本 Y M C A 同盟出版部 1986.
- 7) Ford, Phyllis M., *Principles and Practices of Outdoor/Environmental Education*, John Wiley & Sons , New York 1981.
- 8) Hammerman, Donald R., "An Historical Analysis of the Socio-Cultural Factors that Influenced the Development of Camping Education," Unpublished Doctoral Dissertation, The Pennsylvania State University, 1961.
- 9) Hammerman, William M., *Fifty Years of Resident Outdoor Education*, American Camping Association, Martinsville Indiana 1980.
- 10) Hoshino Toshio., "Group Dynamics in Japanese and American Camp Programs," *Camping Magazine*, 20-23, February 1986.
- 11) Hoshino Toshio., "Outdoor Education in Japan," *Journal of Outdoor Education* 20: 30-33 1986.
- 12) Knapp, Clifford E., and Goodman, Joel, *Humanizing Environmental Education*, American Camping Association, Martinsville, Indiana 1981.
- 13) 宮下桂治「我国における野外教育の歴史的考察—野外教育の今日的課題—」*順天堂大学保健体育紀要* 第25号, 96-107 1982.
- 14) Nold, Joseph T., "Outward Bound Approaches to Outdoor Education," in *Readings in Adventure Education*, Northern Illinois University, Dekalb, Illinois 1976.
- 15) Partridge, E Dealton., "Some Psychological background of Camping," *Camping Magazine* 15:6-8 1943.
- 16) 齊藤仲次「図説 野外教育」新思潮社 1968.
- 17) 佐野 裕「野外活動における自然意識」*横浜国立大学教育学部紀要* 14 50-66 1974.
- 18) Sharp, Lloyd B., and Osborne Ernest C., "Schools and Camping," *Progressive Education* 17:236-239 1940.
- 19) Sharp, Lloyd B., "Camping and Outdoor Education," *NEA Journal* 35-6: 366-367 1947.
- 20) Sharp, Lloyd B., "Out-of-Door Education A Point of View," *The School Executive* 64:56-57 February 1945.
- 21) Sharp, Lloyd B., "Why Outdoor And Camping Education," *The Journal of Educational Sociology*, 21: 313-318 1948.
- 22) Smith, Julian., Carlson, Reynold., Donaldson, George. and Masters, Hugh., *Outdoor Education*, Prentice Hall 1972.
- 23) ジュリアン・スミス著 芳賀健治 訳「新しい野外教育」不昧堂出版 1985.
- 24) Smith, Julian W., "Outdoor Schools," *The National Elementary School Principal* 31: 30-35 1952.
- 25) Smith, Julian W., "The Outdoor Education Projects' First Year," *Journal of Health-Physical Education Recreation*, 27: 14-15 1956.
- 26) Swan, Malcolm D., *Tips and Tricks in Outdoor Education*, The Interstate Printers & Publishers 1983.
- 27) Van Matre, Steve., *Acclimatizing*, American Camping Association, Martinsville Indiana 1974.
- 28) Van Matre, Steve., *Sunship Earth*, American Camping Association, Martinsville Indiana 1979.
- 29) Winner, Morris., "Developing a Rationale for Outdoor Education," Unpublished Doctoral Dissertation, Misigan State University 1965.